

自己免疫性肝炎

自己免疫性肝炎とは

本来はウイルスや細菌のような異物をやっつけるはずの私たちの免疫機構が、間違って肝臓の肝細胞をやっつけてしまう病気です。

原因は

明確な原因は、まだ分かっていません。ただ、一部のウイルスが関係している場合もあるようです。

症状は

何も症状がない場合から、身体のだるさを感じるまで様々です。症状のない場合も多いですので、血液検査が診断には重要です。

診断は

通常のAST、ALTのような肝機能に異常があり、肝炎ウイルスの検査が陰性の場合にこの病気を疑います。自己抗体といって人間の身体の成分に反応する抗体が検出されます。そして、免疫グロブリンとくにIgGが高いような場合に、この病気を疑いさらに詳しい検査を行います。

治療は

間違って起こっている免疫反応を押さえるために免疫抑制剤を使います。通常は副腎皮質ホルモンを使用しますが、場合によっては違う薬が良い場合もあります。重要な点は維持療法を続けることです。

幸いウイルス性肝炎のように高頻度には肝癌は合併しませんが、皆無ではありませんので、専門の医師のもとでしっかり診てもらうことが大切です。